

2. Education for Understanding

ガードナーは、“An absence of understanding”（「理解の不在」）が顕著であると指摘し、理解をもたらすための教育について論じている。

理解とは知識、スキル等を習得した後、新たな状況下で首尾よく、その知識・スキルを活用できることである。この意味において、現在行なわれている教育には殆ど理解と言う現象が見られない。つまり、理解が不在している、とガードナーは指摘している。柔軟にしかも適応力を持って、知識やスキルを活用することが教えられる現在の教育は受けるに値しない。このような欠陥をもった教育はアメリカだけでなく、他国においても問題になっているかもしれない。事態をさらに悪化させているのは、詰め込み式や丸暗記の教育、マルチプルチョイス式のテストである。このような要因が深い理解にもたらすのを妨げている。

問題は教師がどのようにして、深い理解をもたらす教育を実現していくかだ。教師は深い理解を達成させるためにも生徒の理解が本物であるかどうか（Performance of Understanding）を実際の Performance により判断しなくてはならない。生徒に知識を授けただけでは充分ではない。なぜなら、生徒にとって、新しい方法で知識を活用することは簡単ではないからだ。教師はどのように得た知識を生徒が活用したらいいかを示唆し、生徒がそれを実践する多くの機会を設定しなくてはならない。“Ongoing Assessment”（「生徒の取り組み状態をみながら、絶えずフィードバックを与えること」）も、深い理解達成を助けることに貢献する。それにより、生徒は自分の目標遂行のためには教師のフィードバックが重要だと気がつくはずだ（Shaughnessy & Suege, 1994）。

“To foster deeper understanding”（「生徒の深い理解を促進する」）ためにガードナーは大学の同僚と協力してパフォーマンスに基づく “Teaching for Understanding”（「理解のための教育のフレームワーク」）を開発した。

そのフレームワークとは

- (1)「長期（単位又は、コースを通したもの）的なテーマ」，“Generative Topics”を教科の中心として設定する。そして、そのテーマは学生をひきつけるものでなくてはならない。
- (2)「Generative Topics のもとに理解の目標」，“Understanding Goal”を複数、設定する。
- (3) Understanding Goal に合致したパフォーマンス（Performances of Understanding）の機会をできるだけ多く提供し、生徒にこれらのパフォーマンスの意図をきちんと教えておく。
- (4) 学期末だけの評価ではなく、生徒がパフォーマンスするたびにフィードバックを与え（Ongoing Assessment）、深い理解を引き起こすように評価を利用する（Gardner, 1999）。

ガードナーは理解をもたらす教育の必要を説き、それを支えるフレームワークを作成し、教育者に提示した。

- References -

- Shaughnessy, M. F. & Siegel, J. (1994). Educating for Understanding. *Phi Delta Kappan*, Vol. 75
- Gardner, H. (1999). *Intelligences Reframed*. New York: Basic Books.